慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	真福寺遺跡泥炭層出土の土器に就いて
Sub Title	On the potteries of the later stage of Jomon (縄文) Culture from the peat bed of Shimpukuji (真福寺) Site, Saitama Pref.
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo) 鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.39, No.2 (1966. 9) ,p.1(137)- 40(176)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

真福寺遺跡泥炭層出土の土器に就いて

清水潤三
鈴木公雄

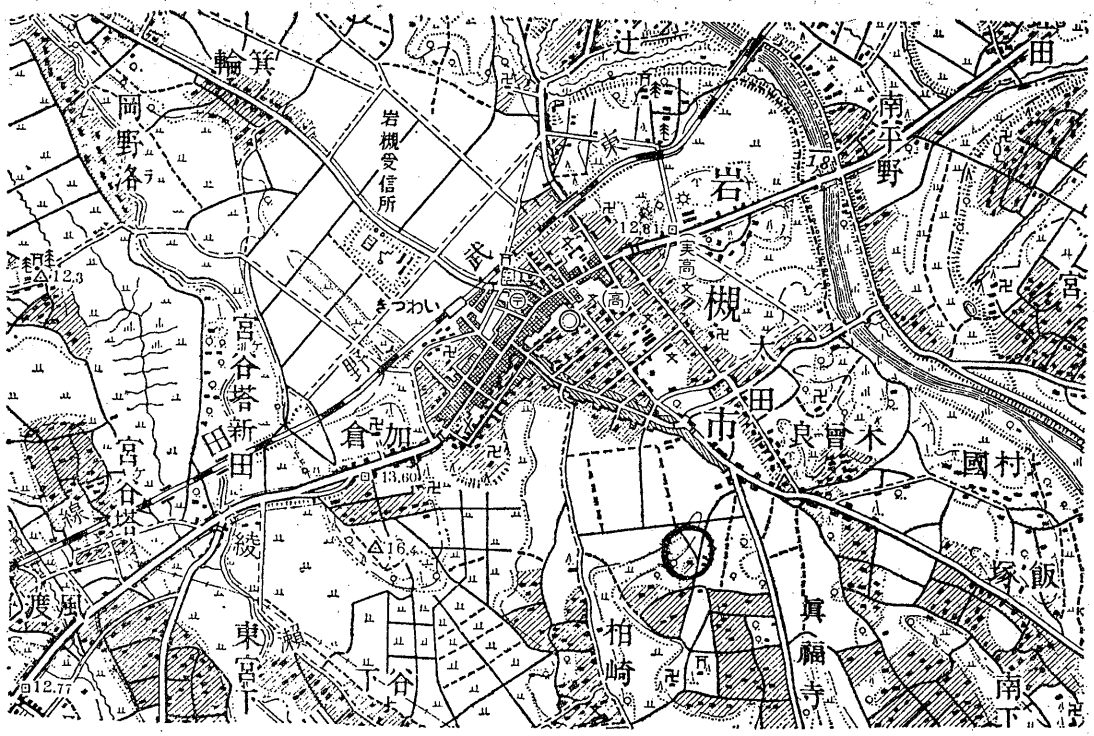
埼玉県岩槻市にある真福寺遺跡泥炭文化層の発掘は、在学中からわたくしの念願であつた。大山柏氏の調査結果を親しく先生の口からお聞きし、竹下次作氏の説明を受けていたからである。昭和二十四年に甲野勇氏の発掘を見学するに及んで、この希望はますます強まつたのであつた。昨四十年八月十七日から二十日まで、幸いにも宿願を達することができたのであるが、これは地主である原田良平氏の御好意と竹下次作氏の支援の賜物で、ここに厚く感謝したい。

いうまでもなく、この遺跡は数ケ所の貝塚と、泥炭文化層から成り、前者は後期の安行式を出し、後者には一時「真福寺泥炭層式」と呼ばれた晩期の土器が出土する。この型式の土器は大山研究所が調査した際、竹下次作氏によつて最初に注意されたが、その間の実情を知る人は意外に少い。わたくしたちの晩期縄文式土器の研究が進むに従い、われわれの資料中にこの種の安行Ⅲc式土器が少いことが明らかになつてくると、竹下氏はしきりに本遺跡の発掘を奨め、実施に骨折つて下さつた。また大山研究所の資料は戦災によつて失われているので、特に秘蔵の拓本を提供されたのであつた。

わたくしはこれよりさき、栗山川溪谷貝塚研究の一環として、鎗田欣治氏の発見された姥山貝塚の発掘を行い、そのZ地点において大量の晩期土器を発見し、爾来継続調査を行つて、稀に見る良好な資料を収集することに成功した。この整

理を鈴木公雄君に委嘱したところ、同君はみごとにそれを完成し、姥山Ⅰ～Ⅵ式を設定して晩期土器の研究に一期を劃したが、なお細部においては問題点も残されており、早稲田大学の西村正衛氏、明治大学の杉原荘介氏らと共同討議を行つた結果は、幾つかの点で異論が出された。そこで茨城県筑地、千葉県久方の両遺跡を発掘し、千葉県多古田遺跡の資料を併せ考えたところ、鈴木君の考察が正しさを加えたと思われた。それ故真福寺において、一層その成果を裏付けようと企図したわけであるが、わたくしは晩期縄文式土器の分類並びに編年的研究のすべてを鈴木君に一任し、単に指導と助言を行うに止めているので、この報文も同君のアルバイトである。ただ、わたくしなりには文化復原という問題が別に残されるため、慶応義塾大学における晩期縄文文化の研究は、共同研究の形をとつているので、前文を執筆することとした。

さて真福寺遺跡は綾瀬川渓谷の左岸に位置し、平坦な台地にあつて、東南方の柏崎部落から延びる小支谷の谷頭に面している。この小支谷の末端に灌漑用の溜池が掘られており、この工事の際に遺物が多数発見されたという。大山研究所では大正十五年この溜池の西側を発掘し、甲野勇氏は昭和二十四年に溜池の東に接する最も低い部分を発掘された。長谷部言人博士もこの泥炭文化層を戦時中調査されている。わたくしは今回の調査目標を土器の資料収集に置き、泥炭文化層の検討とか、有機質遺物の発見を主としなかつたので、湧水量が多いことを考慮し、甲野氏発掘地点の南側高所を選び、溜池の南岸とほぼ並行に、池の東側にはじまり、東へ延びる巾二米長さ八米のトレンチを設けた。発掘を進めると黒褐色土（耕作により攪乱されている）三五糎、その下に泥炭層五〇―七〇糎、ローム質粘土層五〇糎以上、という層序がたしかめられたが、この泥炭層は泥土と呼ぶべきもので、アシ類などの植物質はほとんど残存していなかつた。これによると地点選定の上では泥炭層の末端にあてており、当初の計画に適合したが、降雨が激しく原田氏の助言で期日を延期したほどであつたためか、地表下わづかに三〇糎で早くも湧水を見、電動ポンプを借用して、漸く掘り進みえたような状況となり、層序による出土遺物の区分に困難を感じた点では、予想を裏切ることが大であつた。また、そのため労働力も不足を



真福寺遺跡地形図（五万分之一大宮）

告げ、さらに高所へと拡張発掘を試みることもできず、やや期待にそむいたのは遺憾である。ただし土器の出土量はかなり多く、台付浅鉢形で典型的な大洞C[1]式の復原完形土器などをはじめ、安行Ⅲc式の資料はほとんど満足すべき量に達した。慾をいえば姥山Ⅱ式、安行Ⅱ式の破片が泥炭層下のローム質粘土層から多く発見されるように観察されたが、正確な層序として把握するには、なお十分でなかつた点が残る。またこの泥炭文化層の在存する幾分低い谷頭の部分から、南へごく緩いスロープがのびて平坦な台地になるが、貝塚はこの台上に散在している。大山研究所は大正十四年から昭和初年にかけて調査を反復し、東京大学人類学教室でも幾度か発掘を行い、その際方形の大竪穴住居址を調査されたという。その詳細が明らかにされるのを待望してやまない。さらに、昭和九年十月東京人類学会の創立五十年大会に際し、この地に貝塚見学旅行が行われ、北縁の部分が掘られた。わたくしが初めて貝塚を発掘したのが実はこの時であつた。（清水潤三）

竹下氏のノートに残された拓本を検討すると、当時真福寺泥炭式と呼ばれた土器の主体をなすものは、近年坂詰秀一氏によつて報告された埼玉県石神貝塚の貝層外から一括出土したという安行Ⅲc式土器に極めてよく類似しているから、[4]同じく安行Ⅲc式といわれているものでは

あるが、神奈川県杉田遺跡より出土した一群とは、[5] かなり異つた様相を示すのである。かような事から、一概に安行Ⅲc式といわれて来たものの中には、ある程度異質の特徴をもつものが含まれているのを知り、複雑な様相を呈している事実に驚かされたのである。

筆者等は東部関東地方を中心に、関東地方の晩期縄文土器の編年学的研究を行つてきたが、その中の一つの課題として安行Ⅲc式土器と前浦式土器との関係をいかに捉えるかという問題がある。筆者等の見解に基けば、前浦式土器は東関東地方に分布中心を持ち、ほゞ大洞C_2式の時期に併行するものと考えられるが、他方前浦式土器と安行Ⅲc式土器は同時期の所産であり、時期的には大洞C_1式に併行するという見解も示されており、安行Ⅲc式と前浦式土器との関係について、さらに具体的な検討を行う必要があつた。[6] 又一方安行Ⅲc式自身についてはこれを二型式に細分し、大洞C_1式と大洞C_2式の併行型式と規定しようとする見解も示されて来て、従来あまり手のつけられていなかつた安行Ⅲc式の検討が急速に進展をみせて来たのである。[7]

以上のような筆者等の要求を満すものとして本遺跡の調査が計画され、幸いにも本遺跡の実情に詳しい竹下氏の教えによつて、泥炭層遺跡の一部がいまだ調査可能であることを知り、地主原田良平氏の理解ある御快諾を得ることが出来、ついに具体化のはこびに至つたのである。調査は昭和四〇年八月十七日～二十一日の五日間にわたつて行われ、かなりまとまつた晩期縄文土器が出土し、ここに所期の目的を果すことが出来た。本稿を草するに当り、本遺跡調査の契機を与えられた竹下次作氏、種々困難の伴う発掘を快諾され、理解ある援助と助言をおしまれなかつた原田良平氏、宿舎その他の点で御支援をいただいた本塾専任講師志水正司氏の三氏に対しては、深く感謝の意を表するものである。又発掘にあたつては本塾高等学校の園凌然、佐志傅両先生を初めとする歴史研究会の諸君、出土品の整理実測については本塾史学科学生、田辺征夫、菱見公利、梅沢園子、小川静子、栗栖扶沙子、藤村東男、岡本孝之、前田燁子の諸君の助力を得ることが出来

た。記して感謝の意を表したい。

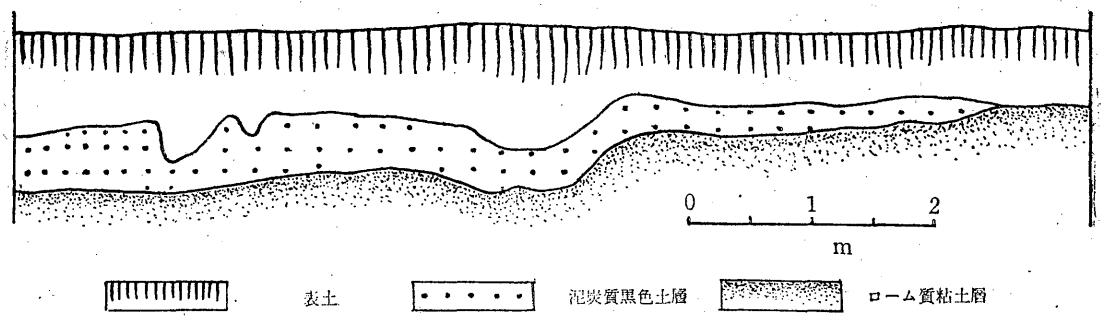
二　遺跡の概要

埼玉県東南部にある大宮市と、千葉県西北端に位置する野田市とを直線で結んだ幅約二十キロメートルの地帯には、江戸川、庄内古川、古利根川、元荒川、綾瀬川などの数多くの河川が流れ、それらによつて開析された東南に細長くのびるいくつかの低い洪積台地がつらなつているが、真福寺遺跡の存在する岩槻支丘も、そのような低台地の一つで、支丘の東側と西側はそれ〴〵元荒川と綾瀬川の溪谷に面している。この岩槻支丘上には、有名な真福寺貝塚をはじめとし、黒谷、浮谷、加倉、木曽良、蓮田などの諸貝塚が群在し、さらに元荒川の溪谷をはさんだ対岸の慈恩寺支丘には、花積、裏慈恩寺、黒浜などの諸貝塚、綾瀬川の溪谷をはさんだ西側の対岸にあたる鳩ケ谷支丘には深作貝塚、さらに南方には川口市石神、同安行領家猿貝貝塚なども存在している。これらの貝塚の内で、蓮田、花積、黒浜、石神、安行などの貝塚は、関東地方縄文土器の編年研究史上に、重要な役割をはたしたものであり、今日なおそのいくつかは標準遺跡として編年上にその名を輝かせている。このようにこれらの地方は、正に縄文文化研究史上の重要な学史的背影を有する中心地である。又この地方は、関東構造盆地の中心部近くに位置しており、多くの河川の流域が集中する地帯であるが、ことに大宮市の西約八キロの地点を流れる荒川をも含めると、約幅三十キロほどの地帯に、東京湾に注がれる主要な河川のほとんどがふくまれてしまうのであり、このような多くの河川の存在と、低台地的環境は、鬼怒川水系以外に大きな河川を持たず、霞ケ浦の内水と平坦で広大な下総台地よりなる東部関東地方や、武蔵野台地、多摩丘陵などによつて特徴づけられる西部関東地方などとは、又趣を異にした地理的環境を形成していると考えられる。

真福寺遺跡は、岩槻市街の東南約一・五キロの地点で、綾瀬川の溪谷から分岐した一支谷が、南西方向から台地に侵入し

て形成した小支谷の谷頭付近にある。有名な真福寺貝塚は、本地点の東方約二百メートル程の所にある。[1] 泥炭層遺跡発見の動機は、この谷頭近くに、溜池を作る工事を行つたさい、多量の遺物が出土したことによるといわれている。[8] この溜池は現在も存在しており、溜池を中心とし、その西側と東側にかけての水田下に泥炭文化層の分布をみるようである。溜池の近くの台地上にも少規模な貝塚が一ケ所存在していたようであるが、耕作によつてほとんど破壊されたとみられ、ボーリングの結果貝層の存在は認められなかつた。泥炭層を最初に調査されたのは、大山柏氏を中心とした史前学会であり、この時は溜池の西側を池にそうて台地上から水田面にかけてトレンチを設定して発掘が行われた。[3] この調査では、かなりの量の遺物が出土したが、不幸にも報告前に戦災にあい、全ての資料が焼失し、当時大山史前学研究所所員であつた竹下次作氏のノートに残された拓本が、かろうじて今日まで保存されたのみで、その詳細は明らかにし難い。竹下氏のノートにみられる拓本によつてみると、出土土器は安行Ⅲc式を中心とし、大洞C1式、同B-C式などに好資料があり、姥山Ⅱ式等の晩期前半の資料も少なからず存在しており、今回の我々の調査資料とほとんど同一の内容をもつものである。筆者は旧稿において、真福寺遺跡出土の姥山Ⅱ式土器を紹介したことがあるが、それはこのノートに残されたものの一部をなすものであつた。[9]

大山氏の調査に次いで、やはり溜池の西側を長谷部言人氏を中心とした東京大学人類学教室が調査されたといわれるが、大山氏発掘地点とどのような位置であつたか又出土遺物の内容その他についても詳細は不明である。さらに戦後に至り、甲野勇氏を中心とした日本考古学協会特別委員会のメンバーが、溜池の東側（谷頭側）にあたる地点を調査された。泥炭層内より晩期土器と共にウリなどの種子が出土したと伝えられるのはこの時のことである。甲野氏の発掘地点は、溜池の東側でかなり谷の中央部近くであつたため、泥炭層の発達及び遺物の出土もかなり良好であつたが、湧水によつて調査は多大の困難を伴つたと聞いている。この調査によつて出土した遺物は、今回の我々の調査や、大山史前学研究所の調



第　7　図

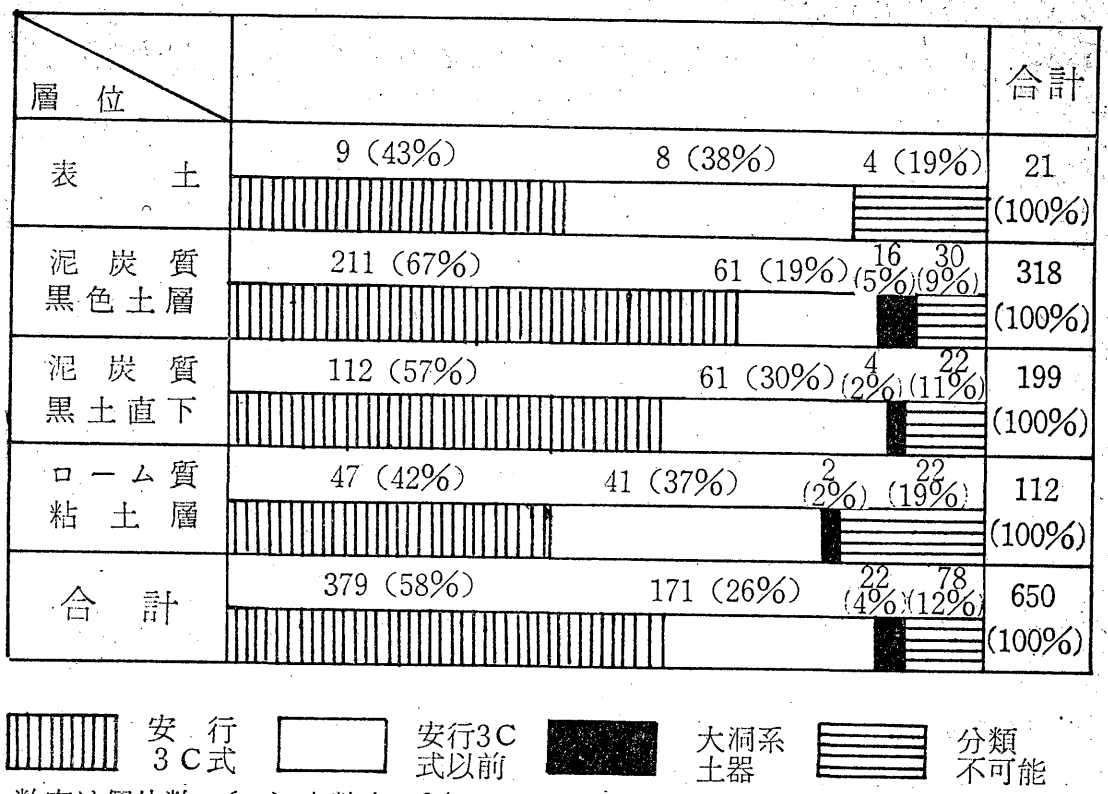
査のさい出土した内容と、やや異つた性格を持つとも云われているが、これも又詳細は不明である。今回筆者等が調査した地点はこの甲野氏の調査された地点に接して、より台地に接近した部分にあたつており、ちようど溜池をはさんで、大山史前学研究所の発掘地点と対象になる所である。

以上のように、真福寺泥炭層遺跡に関しては、我々が調査を行う以前に、過去三回にわたり発掘が行われたことを知るのであるが、近接する真福寺貝塚については、大正十五年大山史前学研究所が発掘を行つて以来、いくたびの調査が行われたか正確には知り難い。おそらく公的・私的な規模を異にする調査が十数度は行われたであろう。この内大山史前学研究所の調査結果が公にされたのみで、他の多くはその詳細を明らかに出来ないのは誠に遺憾である。

今回の調査は二×七メートルのトレンチを台地傾斜面に対し直角方向に設け、谷頭側より順にA_1〜A_4の四区に分つて行つた。層位は第7図に示したとうり、比較的単純で、上より表土、泥炭質黒色土層、ローム質粘土層の三層よりなる。表土は最も厚い部分で約九〇センチを算えるがこれはこの地点を畑として利用する為に土砂を運び込んだ結果であると云う。土器の出土量はいたつて少い。表土下はトレンチ全面にわたつて泥炭質の水分を含んだ黒色土層が分布しており、遺物の出土量は増加する。この土層は第7図にもみるように、A_1区ではうすく、A_4区に近ずくにつれて換言すれば溜池に近ずくにつれて厚くなり層として発達して来る。最も良好な状態はA^3区の、壁近くであり、大形土器片がまとまつて出土し極部的には泥炭層も存在した。出土遺物の大半はこの層より発見されており、本遺跡の主要包含層であると認められた。おそら

く本層がさらに発達して泥炭層につらなるのであろう。泥炭質黒色土層下は、やや褐色をおびたローム質の粘土層となる。本層と泥炭質黒色土層との境界付近には、やや遺物の出土が多いが、粘土層中になるとその出土量はかなり目立つて減少する。しかし乍ら完全な無遺物層に移行するのは、さらに下部になるもようで、我々は粘土層を地表下一・五メートルまで堀り下げた所で湧水が激しく以下の調査を打ちきらざるを得なかつたが、その時点でも同層中からはいまだ散見的にではあつたが遺物の出土をみていた。ボーリングによると、粘土層下は約四〇～五〇センチで砂層となるもようであり、この砂層が基盤となるようであつた。

我々は発掘にあたつて表土、泥炭質黒色土層、ローム質粘土層及び、泥炭質黒色土層とローム質粘土層との境界付近を仮に泥炭質黒土層直下とし、都合四つの層位区分を作つて出土資料の採集を行つてみた。その内土器片（口辺部破片）に関する結果は第1表にまとめて示したようになる。これによると、安行Ⅲc式と認められる土器



第　1　表

真福寺遺跡出土々器分類表（Ⅰ）

は出土全個体数の五八%を占め、その過半数が泥炭質黒土層の出土である。又、安行Ⅲc式以前と認められた土器は、下層にいくに従つて、同一層内出土の土器個体数内に占める割合が一九%→三〇%→三七%と増加し、反対に安行Ⅲc式は、六七%→五七%→四二%と下層に行くに従つて減少する傾向をみせる。これは、安行Ⅲc式の主要包含層が、泥炭質黒色土層であることと、安行Ⅲc式以前の土器は、より下層が主体包含層になることを示す傾向のあらわれとみてよいだろう。又注目すべきは大洞系精製土器が約二二個体存在するが、その内の十六個体が泥炭質黒土層より出土し、以下の層では六個体しか出土していない点である。この大洞系精製土器については後述するが、その大部分は大洞C1式対比のものであり、これらが安行Ⅲc式の主要包含層に存在する点は注目された。

以上のような点からみて、本遺跡において安行Ⅲc式とそれ以前の土器型式との間には、一応の層位的関係のあることが傾向としては窺える。ただし貝層による分層的発掘の場合と同様な、明確な層位関係とすることは出来ないと思われる。従つて以下述べる出土遺物の分析に関しては層位関係による検討がかならずしも十分ではなかつた点の多いことを明記しておくと共に、分類にあたつても細かな細目に分けることはさけ、大きく安行Ⅲc式以前と、安行Ⅲc式、大洞系土器の三つにまとめて記述する方法をとつたのも、そのような層位関係に基くものであることを、一応おことわりしておきたい。

三　出土土器の分類

今回の調査によつて出土した土器片は、六五〇個体であり、その層位別ならびに大略の分類別による出土量の変化は、第1表及び第2表に示したとうりである。これによつても知られるように、出土土器の大半は所謂安行Ⅲc式が占めており、この他安行Ⅲc式よりも遡る時期の晩期土器ないし後期の土器が一七一個体約二六%存在する。この内でも、姥山Ⅱ式がやや多く、安行Ⅱ式、安行Ⅰ式などの後期末の土器片があり、後期前半の土器片は極めて少い。又安行Ⅲc式よりも下降

する時期の土器としては第2図28に示したような大洞A式併行の土器一個体以外に存在していないのは興味を引かれる。本稿においては全出土土器の内、姥山Ⅱ式以降の晩期土器について、特に安行Ⅲc式に重点をおいて説明し、それ以外の後期土器ないし晩期初頭の土器については、出土量も少いことから省略することにしたい。

分類＼層位	表土層	泥炭質黒土	泥炭質黒土直下	ローム質粘土層	合計
A_1		11	4	2	17
A_2	1	23	11	5	40
B_1		8	5	1	14
B_2		5			5
C	4	62	26	13	105
D	1	30	16	7	54
E		9	9		18
F		8	12	4	24
G		5	3	1	9
H_1	1	16	6	4	27
H_2	2	22	12	10	46
不明		12	8		20
合計	9	211	112	47	379

第2表

真福寺遺跡出土土器分類表（Ⅱ）

第一類土器（第2図1～9・12・13）

（a）四～五単位の大波状口縁の深鉢形土器である。各波頂部に独特の菱状のすり消し文様を配し、その中に沈線による入組文、円圏文などを配する。（第2図1）

（b）口辺が多少内傾し、胴の張る平縁の深鉢形土器。口辺はやや断面が肥厚する傾向を持つものが多く、口辺より胴部最大径付近にかけて、沈線による二帯の枠状文が描かれる。胴部以下は安行系土器に特有の斜方向の条線が施され、底部はすぼまった小平底になるものが多い。（第2図4）

（c）口辺が外にひらき、胴部がくびれる平縁の浅鉢形土器である。本遺跡では、第2図3・6に示したように、口辺部に沈線による波頭状の文様を描くものが目立つている。又第2図6は胴部以下の文様に多少特色があり、より古い時期の晩期土器の伝統が残存していることが窺われる。又第2図2も、本来は皿形土器として別に一項を設ける必要のあるものであるが、出土例も少いので、一応今回はここに含めて処理しておく。（第2図2・3・6）

（d）口辺が内傾し、胴のふくらんだ深鉢形の粗製土器である。口辺部から胴上半部にかけて、条線が引かれるのを特徴とするものである。（第2図9）

（e）口辺が内傾ないし直立する深鉢形上器で、器形全体のプロポーションは（b、d）などと同一である。ただこの手のものは第2図13にあるような小形のものも少くないようである。文様は細密な沈線を矢羽状ないし斜方向に引き、それを半月状の沈線文などによつて区劃した文様を描く。このような土器は、従来姥山Ⅱ式の組成の中に含まれるものと筆者は考えているが、細密な沈線による施文技法そのものは、姥山Ⅱ式に限られず、他の土器型式においても用いられる可能性の強いことが考えられる。この点に関しては改めて後段で触れることにしたい。（第2図12～14）

（f）例外的な土器ないしは極めて少量しか出土しないため分類項の設定が出来ないものを一括した。第2図5・7・8がその代表である。第2図7のものは一応小形の深鉢形土器とすることが出来るだろう。胴部に横走する帯状縄文をめぐらし、口唇部に粘土紐による小突起を配する点は姥山Ⅱ式の特徴を持つものとみてよいが、口辺部に施されたレンズ状のすり消し文様は、やや独特なもので、東部関東地方の姥山Ⅱ式土器にはみあたらない。この文様はむしろ後述する安行$Ⅲ_c$式土器の中の文様の祖形と解することが出来るものである。第2図8もその点は同様で胴部に引かれた孤状の沈線文によるする消し文様は、東部関東地方の姥山Ⅱ式にはほとんどみられない文様構成である。このような文様は、埼玉県を中心とした地域で、晩期前半の紐線文系粗製土器に割にみとめられる文様とみられ安

行Ⅲc式にもこの文様の変形したものが残存する場合があるようである。第2図5は鉢形か深鉢形の器形をとるものと思われるが、明確な所は不明である。口辺につけられた小突起は、やはり晩期前半の特徴を持つものと認められるが、すり消し縄文がやや彫刻的すり消し手法に近い感じを与えている点は注目したい。文様構成からみて、大洞系の精製土器とするよりはやはり関東土着の土器の変種とすべきであろうか。

以上第一類土器として一括したものは、筆者のいう姥山Ⅱ式土器に相当するものである。今回の調査に於いては、出土量が必らずしも十分ではなかつたが、戦前の大山史前学研究所の調査でもほゞ同じ位出土しており、両者を合わせるとほぼ姥山Ⅱ式土器の主要な組成をそろえることが出来る。ただ、この地方の姥山Ⅱ式土器は、特にその文様に於いて東部関東地方のものにくらべ、やや異つた様相を程するものが二・三指摘出来そうである。この点については、本遺跡出土の姥山Ⅱ式土器を先に紹介した折にも多少触れておいたが、[11] ここでは一応そのような姥山Ⅱ式の地域差が指摘しうるという点を述べるに止めておきたい。

第二類土器（第3図～第5図）

（A）口辺が外反し、頸部が「く」の字におれ曲る広口壺形土器である。

頸部のおれまがりが非常にきつちりしているもの（第3図1～4）と、しまりのないもの（第3図7・8・13・14・18）の二者があり、前者をA_1、後者をA_2として分類した。又A_2類については、後述するC類と明確に分離することの困難なものが多少みられたが、この場合は両者の文様構成の差異によつて分離を計つた。

A_1類は第3図1・3・4・第1図6のように口唇上に二個一組の小突起をつけるものが少くなく、口辺の外反する部分は第3図1・2のように無文とするものが最も多いが、中には第3図3のように沈線や列点を施したもの、あるいは第6図5第1図6のように細密な沈線をあたかも縄文の代りのようにつけたものも存在する。おれ曲る頸部

より胴部上半にかけてが主文様帯であり、主に第3図1～4のような列点を伴う帯状入組文が描かれる。この場合用いられる列点の多くは、米粒状ではなく、三角状ないしは単なる上方向からの施文による列点である。又口辺部に細密な沈線を施したものでは、胴部にもやはり同様の文様が描かれるが、この場合注目したいのは、第6図5第1図6のように沈線による入組文が、入組文としてかみ合わされずに、連続したS字状の文様となつている点である。このような文様は、第6図8第1図1のような沈線による入組文の祖形となるものと考えられるものであるが、そこに施文されている細密な沈線が、縄文の代理のような装飾効果をはたしている点から考えると、帯状入組文を持つものよりも型式学的には古いタイプとして理解出来るものであろう。この手の土器には列点文が用いられていないのも、その点を証するようである。

A_2類も文様構成は略々A_1類と同様である。中でも第3図13・14のような細密な沈線によるものは、A_1類と全く同様な文様を持つている。また第3図18第6図8第1図1のような、沈線による入組文以外何の文様も施さない土器が存在する。これもまた列点文を持たないという点から、古いタイプの土器であると考えられるものであろう。第3図7・8の土器はA_1類にはみあたらない文様を施しているが、この文様は後述するC類に一般的に認められるものである。本類がC類と異る点は、C類では口唇直下からいきなり文様を描きはじめるのに対し、本類では口頸部を無文とし頸部以下胴上半部までを文様帯として用いる規制が認められる点にある。換言すれば、C類とA_2類は、共に外反する口辺部を持つた深鉢形土器であり、いくつかの個体においては明確な分離が不可能な場合があるのだが、この場合筆者は、口頸部文様帯と胴部文様帯の区別を明確にしており、胴部を主文様帯としているものをA_2類としてその区別の無いものをC類としたのである。口頸部と胴部の区別をはつきりつけたA_1類土器が存在するのであるから、この場合A_2類が、単なる深鉢形土器であるC類より分離して、A_1類に準じて扱うことは許されると思わ

れる。全体で五十七個体出土している。（第3図1～18第6図5・8第1図1・6）

（B）

四～五単位の大波状口縁を有する深鉢形土器を一括したが、本類も器形・文様などからして、B_1・B^2の二つに分離して考えることが出来る。

B^1類は第4図1～11に示したものであるが、その特徴は、第4図1・8・11の場合のように菱状の構成文を残していたり、第4図1のような円圏文・第4図2のような口辺波頂部に粘土紐によるはち巻き状の貼付文を施したり、沈線による入組文などがみられるもの、第4図3・5のように波頂部から垂下させる文様構成を有するものなどが多く、第4図5のようなものを例外的存在とすれば、波頂部の形態はいまだ富士山状に二叉にはなっていないものが主である。これらの器形・文様の多くは、姥山Ⅱ式の大波状口縁の深鉢形土器からうけついだ要素とみることが出来るものであり、その点からだけでも形式学的に本類が古いタイプの土器であることが知られるのである。第4図1～3・8などは筆者の従来の分類からすれば姥山Ⅲ式土器として認めてもさしつかえないものである。

B^2類は第4図12～14に示したものであるが、B_1類と異る点は、全ての土器の口辺波頂部が二叉となり富士山状となること、その下に単独で三叉文ないし入組文が施され、それをとりかこむ様にレンズ状の沈線文が配され、多くの場合その中に列点を伴う（第4図14は例外）点である。このような波頂部の形態ないしはその下に配される文様の構成はB_1類とは趣を異にする。第4図6・7・10などがB_1類とB^2類との中間的な様相を示すものとみられる。このようなB_2類土器は形式学的な系列の上からみればB_1類よりも新らしいタイプを代表するものとすることが出来ると思う。従来いわれていた安行Ⅲc式の波状縁土器はこのB_2類のようなものが多く報告されているようである。B_1類は十四個体、B_2類は五個体合計十九個体出土した。（第4図1～14）

（C）

口辺が外反し、胴部のやや張った深鉢形土器である。第1図3・4・8などに示したような形態が代表的なもので

ある。文様を持つものと（第4図15～27、第1図8第6図7）無文のもの（第4図29・32・34～36第1図3・4）に大きく分けられる。有文のものの多くは、外反する口辺部が主文様帯となり、くびれ部付近に平行沈線列点帯をめぐらし、以下の胴部は素文とする。この点くびれ部（頸部）以下の胴部を主文様帯とするA1・A2類とは区別することが出来る。文様は沈線と列点によって構成されるものが大部分で、第4図15・16・26のように孤線を二本引いてその中に列点をうめたもの、第4図17・18・19・21・25のように、平行沈線による直線・曲線を引き中に列点を施すもの、第4図22のようにレンズ状の沈線を引き木の葉状の文様を描くもの、などいくつかの種類がみられる。又第4図23・30・31のような沈線のみの文様を持つものもあるが少い。第6図7及第1図8に示した土器は本類としてはめずらしい文様である。このような文様構成に類似したものは、しいて求めれば千葉県天神前遺跡に類例がある。[12] 又尾張馬見塚遺跡出土土器中に、これと全く同一の文様構成を示すものが存在するが、[13] 両者をいきなり対比させるにはやや問題が残ると思われる。無文の土器は、多くの場合土器の製作中に行われた器面調整に基く擦痕がみられる。胎土中に砂を含むものが多いのは、有文・無文共通である。本類には口唇上にあらい沈刻を施したものがいくつか存在するがA類でみられたような口唇上の小突起を持つものは存在しない。有文と無文合計で一〇五個体出土しており、これは単一の分類項の土器としては本遺跡出土土器中で最も多い。（第4図15～36・第1図3・4・8・第6図7）

（D）

浅鉢形土器に属するものを一括した。第5図1～13・17・19・21・22などに示したものであるが、第5図1～3にあるような細密な沈線文を使用し、沈線による入組文を配したもの、第5図4～7に示したような波頭状の沈線文様を描く姥山Ⅲ式の浅鉢形土器として考えられるもの、第5図10～12のような太い沈線と列点による文様構成を示すもの、さらに第5図13・17・19にみられるような三叉状入組文が施されるものなど、いくつかの変化がみられ

る。器形の上からは第5図2・13のように胴部のくびれが著るしいもの、第5図1・17・22のように多少くびれるもの、第5図3・11・12のように直線的な器壁をもつものなどがみられる。口縁の形態は多くの場合平縁で、なかには第5図11のような波状口縁を持つとみられるものもあるが、量的には少い。第1図7に示した土器は完形の浅鉢形土器であるが、くびれ部に一条の沈線をだらしなくめぐらした他は文様を持たない。口唇上から口縁うら側にかけて二個一組の粘土紐による貼付文がみられる。焼成は不良だが器面は一応平滑である。胎土焼成は全体として粗悪軟弱であるが、細密な沈線の施文されているものの中には胎土焼成共に良好のものが目立つている。全体で五十四個体出土しており、A類C類についで出土量が多かつた。

（E）

小形の椀形土器と思われるものを一括した。第5図14・16・18、第1図2に示したのがそれに相当するものである。第5図14は口辺と底部近くに二本の平行沈線をめぐらしているが、これは姥山Ⅱ式の椀形土器にもみられるもので、或はより古い土器とした方が妥当かも知れない。第5図16は基本的には14と同様のものであるが、平行沈線間に列点文を持つ。この列点の形からみて、姥山Ⅲ式土器の中に含めて考えることが出来るものであろう。第5図18も第1図2に示したものも、全体として古い様相を伝えているものと考えられるが、層位的な関係が十分でないため、一応本類に一括して扱つておくことにしたい。十八個体出土している。

（F）

小形の深鉢形土器ないしは鉢形土器と考えられるものを一括した。第5図23～29に示したものがそれに当る。形態はさまざまで、波状口縁をなすと考えられるもの（第5図23・24）小波状口縁をなすもの（第5図27）もあるが、これらは例外的な存在である。第5図25・29なども他に同類がみられない。第5図26・28のようなものが一般的であり、この他図示しなかつたが無文のものが多少存在する。二十四個体分出土した。

（G）

台付土器と考えられるものを一括した。第5図15・20に示したものがそれにあたる。15・20のような低い波状縁を

なす土器は、B_2類のような波状縁土器との分離が必らずしも十分でないうらみがあるが、他の遺跡の出土例からみてこれらは大形の台付土器の破片であると思われる。文様には三叉文の発達が窺われる。この他図示しなかつたが、台付土器の脚部と思われるものも出土している。その中で特徴的なものとして外に開いた脚部に沈線を施文したものが存在するが、これはおそらく堀之内貝塚出土の人面をかたどつた台付土器と同様な土器の破片と思われる。[14] 九個体出土した。

（H）

口辺が直立ないしやや内傾し、胴のふくらむ深鉢形土器を一括した。全体としてみると口辺近くに文様を有するものと素文のものに分けられ、前者をH_2、後者をH_1として分離して考えてみたい。H_1は第5図30・31・33に示したもので、30のように口辺が内反するものもあるが多くの場合31・33のような形態のものが多い。胎土・焼成は全体として軟弱粗悪なものが多い。

H_2類は第5図32・34・36・37、第6図2～4・6に示したようなものであり、文様に種々の変化がある。第5図32は口辺が肥厚し、胴部にS字状の連続文を配しており、全体として古い様相を示している。第5図34・37なども同様に解することが出来る。第6図2・3・6に示したものは姥山Ⅲ式の枠状文を有する土器であるが、特にこの場合第6図6のような安行Ⅱ式土器の突起を残している点は注目したい。第5図36は沈線と列点による文様を有するものである。このように、H_2類も又C類・D類と同様に、その中の文様にいくつかのグループが存在する。焼成・胎土は、第5図32・34や第6図2・6などは良好で第5図30・36のものの方が粗悪な点が注目される。四十六個体出土した。

以上第二類とした土器は、従来の安行$Ⅲ_c$式に相当するものを多く含むものであるが、すでに述べて来たとうり、これらの中には、姥山Ⅲ式土器として摘出し得るもの、或は特異な細密沈線による文様を有する一群など、いくつかの問題ある

ものが含まれておりその内容は意外に複雑な様相を示している。本来ならば、それらの土器を個別に類別して説明を加えるべきであるかも知れない。しかし、それらの内で、量的に主体となるものが一応はつきりしており、各々を分離するだけの細かな層位的なうらずけに欠ける面があることもあつて、あえて個々別の記述はさけて一括してとり扱うことにした。ただ、このような本類の内容については、後段でやや詳しくふれたいと思う。

第三類土器

大洞系精製土器とそれに類するものである。

（A）大洞B式ないしB—C式に相当するもの、或はそれらの大洞式土器をモデルとして作成されたと思われる土器を一括した。第2図10・11・20・27などがそれにあたる。これらの内で最も大洞式土器の規制を忠実に守つているのは、第2図27ぐらいで、これとても必らずしも正確に大洞式土器の規制を守つたものとはいい難いかも知れないが、第2図10・11・20などにくらべれば、ましな方である。第2図10・11は大洞式土器というよりむしろ大洞式土器の分布圏の周辺部に発生した類大洞式土器という方が適当なものかも知れない。これらは、後述する大洞C_1式がかなり忠実に大洞式土器の文様構成を保持しているのに比して対象的な様相を示していて興味を引かれる。

（B）大洞C_1式ないしは大洞C_1式をモデルとして作成されたと思われる土器であり第1図4のような完形の優品の他、第2図15～19・21～26・29などが存在し、大破片も少からず存在する。第1図4は基台の一部をわずかに欠くのみの完形品であり、口唇部の彫刻的な装飾、胴部にめぐるこまかな縄文を用いた雲形文などは、大洞C_1式の特徴をよく伝えている。胎土も精良な粘土を用い焼成も悪くない。ただ台脚部の形態が、東北地方のそれにくらべやや粗雑であること、雲形文の単位が二単位で、文様が横にのびている点、彫刻的すり消し文様の手法がやや粗雑な点などが指摘される。しかしそれらの点を考慮してもなお、本例が従来関東地方で出土した大洞系精製土器の中でも優品の

一つに数えられることはまちがいない所であろう。本例の他では第2図18・22・25・29などが、かなり大洞C_1式の文様を忠実に守つた土器とすることが出来るだろう。それに対し、第2図15～17・19・21・23・24・26はどは、多少くずれた文様をもつものと考えられるが、これらとて、そのもとになつたモデルが大洞C_1式土器であるという点まで否定するものではない。全体の器形をみると、第2図21・25のような深鉢ないし鉢形となるものもあるが大部分は皿形・浅鉢形ないし台付土器に相当するものである点は興味を引かれる。この内第2図15・29のように底部近くがくびれて小円底を持つと思われるものなどは、東北地方の大洞C_1式の浅鉢ないし皿などにはあまり多くなく、むしろ長野県中ノ沢遺跡などの皿形土器につながる要素と考えられないであろうか。(15)

（C）

大洞C_1式以降の土器であるが、第2図28に示した大洞A式相当のものが一例存在するのみである。本遺跡から大洞A式が出土したという事は過去に於いて報告されていなかつたが、かつて大山史前学研究所の調査の折、やはりこのような土器が一片出土している事実を竹下氏のノートによつて知ることが出来た。おそらく狭い範囲かも知れないが本遺跡のどこかに大洞A式土器を出土する地点が存在するものと思われる。

以上大洞系土器について触れたが、これらは個体数にして約二十二個体出土しておりその内の大半は図示したとうり大洞C_1式である。又出土した層位も、第1表に示したとうり、泥炭質黒土層より完形一個を含む十六個体が出土し、その大部分が大洞C_1式土器であるというまとまつた状態をみせているのは注目すべきである。本遺跡の主要包含層が泥炭質黒色土層である以上、多少層位的なうらずけが欠けるとしても、これら大洞C_1式土器は泥炭質黒色土層の主体的な土器に伴つたものとみるのが合理的な解釈であろう。

なお、本調査においては、他に石器・土製品等が若干出土しているので、以下簡単に説明する。

乳棒状石斧柄部断片　一

緑泥片岩製の乳棒状石斧の柄部片で、ほゞ石斧の中央部より破損し以下の刃部を欠いている。柄頭にあたる部分は打撃によってチビている。現在長約八・五センチ、最大幅四・二センチ。泥炭質黒色土層出土。

石鏃　一

チャート質の岩石で作られたわたくりのある二等辺三角形を示す無柄石鏃で、わたくりの一方を欠失している。調整剝離は整つており、入念な作風をみせるものである。長さ二・六センチ。粘土層出土。

石棒頭部断片

硬砂岩系の岩石で作られた石棒で、頭部に沈線による孤線、枠状の文様が描かれている。現存長九・七センチ、最大幅四・五センチ。泥炭層出土。

小形双孔土製品　一

長径四・二センチ、短径三・一センチの楕円形を呈するスプーン状の小形土製品。長軸の一方のはし近くに二個の小孔が貫通している。内面、裏面共に文様を欠く。類例としては茨城県立木遺跡より出土した異形土製品があるが、これは形態が多少異つており、文様を有している。[47] 泥炭層直下出土

土偶断片　一

土偶腰部（左右不明）と考えられるもので一部に沈線と列点による文様が描かれている。泥炭層直下出土。

耳飾　三

完形一個を含む三個体分が出土しているが内二点はぶあつい作りの滑車形耳飾の断片でいずれも素文で、表面は平滑に調整されている。他の一点は径約二センチの小形品で、中央に透彫を有し、三叉状の入組文様を持つた精製品である。泥岩層出土。

小玉　一

青白色の自然細礫にかたぎりによつて一孔をうがつた小玉である。岩質は硬く、おそらく蛇紋岩系統の岩石と思われる。長径一・七センチ、短径〇・七センチの不整楕円形をなす。粘土層出土。

四　出土土器に関する二・三の問題

第一類土器について

本遺跡より出土した姥山Ⅱ式土器は、先にも少しく述べておいたとうり、山武姥山遺跡[16]、多古田遺跡、久方貝塚など[17]、筆者の調査した利根下流地域の出土例と対比させた場合、多少地域差による差異としてうけとれるものが存在する。その具体的な例は、第2図7及8に示したものの他に、大波状口縁の深鉢形土器に於けるすり消し縄文の施される部位の差異などもあげられる。筆者はかつて姥山Ⅱ式土器の性格を論じた際に、本遺跡出土の姥山Ⅱ式大波状縁深鉢形土器一例を図示したが、その土器は、従来縄文の施される部分と、すり消される部分が逆転している例であつた。姥山Ⅱ式のこの手の土器には、通常菱状の沈線でかこまれた中に縄文を施し、所謂菱状のすり消し文様が描かれるが、真福寺貝塚より出土したものには、その中を逆にすり消してしまうものが存在するのであり、このような例は、筆者の調査例では、茨城県築地遺跡出土例などが知られてはいるが、利根下流地方では、見あたらないようである[18]。又姥山Ⅱ式土器における粗製土器は、第2図9のような口辺部に紐線を持たず、胴上半部に水平及斜に条線を施したものが一般的であるが、奥東京湾地方では形態は同じでも条線を伴わぬ素文の粗製土器をも伴うようであり、これ又茨城県築地遺跡でも同様であつた[19]。このような素文の粗製土器は、北関東地方にいくつか好例が知られており[20]、奥東京湾地方のものは、それらの地方からの影響が考えられるが、時期的な問題が未解決であり、明確には決定出来ない。このような粗製土器に於ける奥東京湾地方と、利

根下流地方との差異は、姥山Ⅱ式の時期よりも遡る晩期初頭ごろにも存在していたようであり、少く共安行Ⅱ式土器ごろまで、かなり明瞭にたどることが出来る。

以上のような点からみて、姥山Ⅱ式土器にみられる両地方の地方差は、いくつかの様相に分解することが出来、又そのうちの一部は晩期初頭ごろから発生して来たものであると考えられるが、この点についてはいずれ将来に於いてふれる事が出来ると思うので、いまは指摘しておくに止めておこうと思う。

第二類土器の内容について

第二類土器としたものは、縄文を欠き、文様が沈線・列点などによって描かれるものであり、従来の安行ⅢC式に相当するものが大部分を占めるが、すでに述べたとうり、その中にはいくつかの異つたグループが存在する。それらを改めて整理してみると以下のようになる。

① 縄文は使用しないが、独特の細密な沈線を矢羽状、格子状ないし斜に施文して文様を描くもの。器形上からみるとA^1類（第1図6第6図5）、A^2類（第3図13・14）D類（第5図1～3）H^2類（第1図・9、第6図・1）などに類例を見出せる。付随する文様としては波線による入組文（第5図1・2）やその粗形とも考えられるS字状連続文（第1図6、第6図5）が多くみられ、又口唇部に二個一組の粘土紐による貼付（第1図6）もみられる。三叉状入組文・列点文などを併用しない点が注目される。

② 筆者の云う姥山Ⅲ式土器に相当するものである。器形上からみると、A^2類（第3図18、第1図1）、B^1類の大部分（第4図1～3・8・11）、D類（第5図4～7）、E類（第5図16・14）、H^2類（第5図32・38）などに類例を見出すことが出来る。文様としては波状縁土器にみられる菱状の構成文（第3図1・8）や円圏文（第3図、1）あるいは粘土紐の貼付文（第3図2）や浅鉢形土器にみられる波頭状の沈線文（第4図6・7）広口壺形土器にみら

れる沈線による入組文（第2図18第1図1）深鉢形土器にみられる枠状文様（第6図2・3・6）などが主なものであり、これらは全てその文様の一部に縄文を用いれば姥山Ⅱ式土器と同一の文様に転化しうるものである。これらの文様の中には、先の①と同様、三叉状入組文が発達していないのもその特徴の一つとして数えられる。ただしこの中で第3図1・3のような、列点文を伴うものについては注意を要する。これらは、後述する③のグループに於いて盛行する文様要素であって、姥山Ⅲ式の本来的な姿ではない。

③ 太い沈線と列点文によって文様が構成されるものである。器形上からみるとA_1類（第3図1～4）、A_2類（第3図5～8）、B_1類の一部（第4図6・7・9・10）、C類（第3図15～22第1図8）、D類（第5図10～12・22）、F類（第5図28）、H_2類（第5図36）などに類例をみいだせる。文様としては、A_1・A_2類では、沈線による入組文が帯状入組文風に変化し、その中に列点をうめるもの、（第3図1～4）が多く、C類・D類・H_2類では、平行沈線による直線と曲線をくみ合せてその中に列点をうめたもの（第4図15～22、第5図10・11）レンズ状の沈線文と列点を併用するものなどが目立つている。ここでも三叉状入組文ないし単独の三叉文は未発達である。このような特徴を持つた土器の類例としては、石神貝塚貝層外より出土した一群、[21] 堀之内貝塚BⅢ式、D類土器の一部分、[22] 目黒東山遺跡の第一類土器の内で列点文を主とする文様をもつものとされた一群などがあげられるが、[23] 中でも石神貝塚例に最も近似した内容を示すとみてよい。第二類の中で最も多く出土しており第二類土器の主体をなすものと考えられる。

④ 沈線と列点を主調とするが、一部では列点を欠いたり、又三叉状入組文、単独の三叉文が加わつている一群。器形上からみると、B_2類（第4図12・14）、D類（第5図13・17・19）、F類（第5図26・29）、G類（第5図15・20）などに類例を見出だせる。文様の多くは③と同様な構成をみせるが、その中で特に三叉文の使用が装飾効果の上で

重要な役割りをはたしていると思われるものである。量的には、①とほゞ同数出土しているが、第二類全体の中で占める割合は少い。

以上四つの特徴的なグループが第二類土器の中に存在するのだが、この四つのグループは、先にも述べたように、縄文を使用しないという共通性を持ち乍らも、それ〴〵の文様構成には差異が認められる。

①のグループについて他の類例を求めると千葉県堀之内貝塚B地点、東京都目黒東山遺跡、埼玉県膝子遺跡[24]、神奈川県杉田遺跡出土土器などの一部に、これに相当するものが存在している。又埼玉県下になお二・三の類似資料の存在することを聞いているが、詳細は不明である。しかし乍らこれらの諸遺跡の出土例は量的に極めてとぼしく、十分な比較が行えない。ただ、その分布が、本遺跡を初めとして、埼玉県、千葉県西北部、東京都などに求められる傾向は一応注目すべきである。又千葉県の東南部特に利根下流地方では、このような土器は現在のところ未発見であり、この地方にまでその分布が及んでいるとは考えられない。

所属時期については、所謂安行Ⅲc式に含めてとり扱うべきか否か、問題のある所である。細密な沈線を、すり消し縄文手法と同様な装飾効果を持たせて使用している点、口唇上に二個一組の粘土紐による小突起を配する点、沈線による連続S字状文を多用し、三叉入組文の未発達な点、列点文を用いていない点等々の文様上の特徴、又胎土焼成などの面からみれば、明らかに古い様相を示していることが理解されよう。これらの多くは、姥山Ⅱ式、同Ⅲ式にみられるものであり、その伝統を継承するものとみられる。又細密な沈線による施文も、姥山Ⅱ式土器の組成の一部にすでに存在しているものである。

以上の点を総合すれば、①のグループの土器が、古い様相を持っていることが理解されるが、これらが、安行Ⅲc式から分離さるべきものであり、かつ又独立して存在する一型式として認定するためには現在の資料があまりに少なすぎるとい

わざるを得ない。又安行Ⅲc式以前の、姥山Ⅱ式ないし同Ⅲ式の組成の中に含まれる存在であるか否かも、同様にきめ手をかいている。従つて、このグループの性格を検討することは、より資料の増加した将来に行われるべきであると思われるが、先にものべたごとく、利根下流地方にこの種の土器が未発見であり、[25] 現在たどり得る分布範囲が、奥東京湾とその周辺地域に求められる傾向は注目すべきことと考えている。これは、このグループの土器の地域的な分布範囲を暗示するものと考えておきたい。

②のグループの土器は、千葉県山武郡姥山遺跡[26]、同多古田遺跡、同荒海貝塚[27]、同花輪貝塚[28]、同堀之内貝塚B地点[29]、同貝ノ花貝塚[30]、同天神前遺跡[31]、同加曽利貝塚、同犢橋貝塚[32]、茨城県広畑貝塚、同法堂遺跡[33]、同築地遺跡[34]、埼玉県奈良瀬戸遺跡[35]、同膝子遺跡[36]、同小室氷川神社遺跡[37]、群馬県板倉遺跡[38]、東京都目黒東山遺跡等[39]々から類例の一部が出土しており千葉・埼玉県下にはこの他にも未確認ではあるが同類の資料が存在するといわれている。これらからも知られるように、利根下流域から埼玉県東部にかけてが分布範囲となつているが、西南関東地方には稀薄な傾向が認められる。又これらの内で、利根下流域に存在するものは、多くの場合姥山Ⅱ式の伝統を強く継承しているが、埼玉県東部を中心とした地方（所謂奥東京湾地方）及その周辺部では、多少異つた様相を持つて来ることが指摘出来る。たとえば、埼玉県奈良瀬戸遺跡、群馬県板倉遺跡、埼玉県膝子遺跡などにおいては、明らかに安行Ⅲc式に於いて盛行する列点文と同種のものが併用されており、このような傾向を示すものとしては、千葉県堀之内貝塚B地点、東京都目黒東山遺跡出土例の一部などをも含めて考えることが出来る。この場合の安行Ⅲc式的な要素は、安行Ⅲc式といわれるものの中でも、一般に古い時期といわれているものにみられるもので、具体例としては、埼玉県石神貝塚出土土器を土げるのが好適である。[40]

以上の点から考えると、②のグループは、さしあたつて石神貝塚出土のような安行Ⅲc式、換言すれば本遺跡における③のグループとの関係が問題となる。要するにこれは安行Ⅲc式と姥山Ⅲ式との相互の関係いかんということであり、この場

合奥東京湾周辺に存在する姥山Ⅲ式に、安行Ⅲc式の文様要素の一部が複合していることを、どの様に理解するかが先ず問題となろう。これについては、

（Ⅰ）姥山Ⅲ式と安行Ⅲc式が、同時に存在しており、両者が接触した結果このような文様の複合が行われたと解する。

（Ⅱ）姥山Ⅲ式が、さらに発達して安行Ⅲc式に移行して行くさいの過渡的な現象であると解する。

という二つの考え方が出来る。すなわち、（Ⅰ）に於いては姥山Ⅲ式と安行式cとを地域を異にした併行型式として捉えるのであり、（Ⅱ）では両者は縦の時間的な関係に配列されるものとして考えるのである。現在与えられた事実からこの点を検討すると、先ず、

（1）安行Ⅲc式は、利根下流地域を中心とした東関東地方には分布が及んでいない。

（2）安行Ⅲc式と姥山Ⅲ式の文様要素が複合する例は、利根下流地域にはほとんどみられず、奥東京湾地方以西にみられる。

という点が指摘出来る。このような点は姥山Ⅲ式と安行Ⅲc式が主たる分布地域を異にすること、そして両者はおそらく併行関係にあつたと解することが合理的であることを示すとみられる。又安行Ⅲc式の主たる分布地域が、西南関東から奥東京湾地域にかけてであることは広く認められており、姥山Ⅲ式は東関東地方に分布の中心をおき、一部奥東京湾地域以西に進出している。従つて奥東京湾地域は、両者の分布の複合する地域として捉えられるのであり、この点からも（Ⅰ）のようなケースが起り得ると考えられよう。

以上のような点からみて、筆者は（1）の考え方を支持したく思うのだが、ここに示した論拠は、必らずしも（Ⅱ）のような考え方が成立不可能と断定するまでに確固としたものでないことは改めて云うまでもない。それは、姥山Ⅲ式に関してすでにいく人かの人によつて批判が行われているとうり、姥山Ⅱ式との間に明確な層位的関係が確認されていないという点に

あるのであつて、[41] この点に関しては、なお今後の検討にゆだねる部分のあることを認めなければならないだろう。

③のグループは、本類の主体となるものであるが、埼玉県石神貝塚、同並木貝塚、同奈良瀬戸遺跡、同膝子遺跡、同小室氷川神社遺跡、千葉県貝ノ花貝塚、同堀之内貝塚B地点、東京都目黒東山遺跡などから類例が出土しており、なお多くの資料が存在するのである。本遺跡のものと最も類似した例を上げるとすれば、石神貝塚例であり、その内容はほとんど一致するといつてよい。分布に関しては、茨城県法堂遺跡のような例はあるとしても、一応利根下流域には分布が及んでおらず、埼玉県を中心とした地方に分布が多い。又すでに指摘されているとうり神奈川県杉田遺跡出土の安行Ⅲc式中には、この種の土器が少い。このような点から、③のグループのような土器は、杉田遺跡の安行Ⅲc式とは型式上分離して考えるべきものであり、文様構成等からみてより古い時期に相当するものではないかという推測が、かなり広く行われている。たしかに、この種の土器が、

(1) 沈線による連続入組文風の文様を有する点。
(2) 三叉状入組文ないし三叉文が未発達であり、文様の主調が、沈線と列点にある点。
(3) 口唇部に粘土紐貼付による二個一組の小突起を残している点。

などは、先行する古い型式の伝統を引くものであり、様相として古いものであると考えることが出来るが、これから直ちに杉田例と本例（石神例）を時期の新旧として扱うには充分でないと思われる。杉田例と本例が、確実に時期的な差異として規定されるためには、

(1) 杉田遺跡の存在する西南関東地方にも確実に杉田遺跡出土例よりも古いと判断される安行Ⅲc式が存在し得ること。
(2) 奥東京湾地域で、やはり石神貝塚出土例や、本例よりも新らしいと判断される安行Ⅲc式土器が摘出されること。

という二条件が満たされる必要がある。先ず(1)についてみると、杉田・桂台両遺跡の安行Ⅲc式土器にも、古い様相を伝

えているものが少量存在しており、又他に、神奈川県折本貝塚、[42]東京都下沼部貝塚[43]などからも、古い様相を示すものの存在が知られ、これらの地方にも杉田A類より古い安行Ⅲc式の存在が予想されるが、これらが主体的な存在を示すものか否かについては確証を欠いている。又（2）についてみると、埼玉県奈良瀬戸遺跡などにみられるように、杉田A類に類似する土器を多量に出土する遺跡が存在しており、千葉県堀之内貝塚B地点、同貝ノ花貝塚、などからも多少出土しているがこれも又先の例と同様、主体的な存在を示すかどうかについては、なお確証が得られない。けれども奥東湾地域においては、埼玉県石神貝塚、同膝子遺跡のように、杉田A類のような安行Ⅲc式をほとんど伴わない遺跡と、奈良瀬戸遺跡のように両者が出土する遺跡とが存在するのであり、これは両者の時間的な関係に起因するものと解することが出来る。

これらの点からみて、やはり杉田A類のような安行Ⅲc式と、石神例や本例のような安行Ⅲc式は、同時期の地方的な差異とするよりも時期的な差として捉える方が適当であると考えられる。又仮にこの点が未解決であるとしても、両者は明らかに異つた様相を相互に示しているのであるから、その両方共に安行Ⅲc式という名称を用いることは、混乱を招くおそれがあり記述上も極めてわずらわしい。両者をそれぞれ杉田A類、石神式と呼ぶ方がより適切と考えられるが、石神式に関しては、すでに安行Ⅲa ないしⅢb 式相当の型式名として用いられたことがあるので、この名称を用いると又別な意味での混乱をひきおこすことが予想される。従つて、杉田A類はそのまま用いるとしても後者については一応真福寺泥炭式という旧来の名称を復活させて用いることを考えたい。この名称はかつて本遺跡を調査した大山史前学研究所の命名になるものであり、その当時出土した土器と、今回の出土土器とは、ほとんど一致した内容を持つものである。従つてこれら③のグループのような土器が本遺跡出土土器の主体を占めているという点からも、今後これらを真福寺泥炭式という名称で呼ぶことにしたい。杉田A類や姥山Ⅲ式との関係などに未解決な部分を残しており、又土器型式としての内容自身も十分分析が出来あがつていない段階で、このような型式設定を行うことは、筆者自身好ましい方法とは思わないが、ここでは一応杉

田A類のような安行$Ⅲ_c$式とは区別しておく必要上からしばらく、この名称を用いたい。

④のグループは、先にのべたように、杉田A類的な安行$Ⅲ_c$式土器である。奥東京湾地方においても、埼玉県奈良瀬戸遺跡、同小室氷川神社遺跡、千葉県貝ノ花貝塚、同堀之内貝塚B地点などから出土している。本遺跡のものは、出土例が少く、図示したものがほとんど全てであり、決して主体的なあり方は示していない。この点が、先にも述べたように真福寺泥炭式より時期的に新らしい土器であることを示すのか或は、同時期での分布地域の相異に基くものなのかが問題とされる訳であるが、本遺跡の調査結果のみでは、そのいずれとするにもデーターが不十分である。この点に関する筆者の予測的見解についてはすでにのべてあるのでくり返さない。

第三類土器について

本類は、大洞系精製土器及びそれに類するものであり、その大部分は大洞C_1式土器が占めている。出土層位も泥炭質黒色土層に集中しており、本層の主体的土器である真福寺泥炭式に伴ったものとみることが出来る。従来安行$Ⅲ_c$式に関係する大洞式は、大洞C_1式であると云われて来たが、近来、大洞C_2式土器もまた安行$Ⅲ_c$式と関係する可能性があると云う見解が示され、これが安行$Ⅲ_c$式の細分化をうながす一つの契機になったことはすでにのべた。しかし今回の成果にみる限り、真福寺泥炭式の如き安行$Ⅲ_c$式に関係するものは、大洞C_1式であるとせねばならないだろう。この事は決して大洞C_2式が安行$Ⅲ_c$式と関係する場合のあることをも否定するものではないが、安行$Ⅲ_c$式と大洞式との相関々係を考える上での一つのめどにはなるだろう。特に本類の中に、大洞A式相当の土器は存在するが、大洞C_2式土器が存在していない点は注目すべきで、これは安行$Ⅲ_c$式と前浦式土器、あるいは前浦式土器と大洞C_2式土器との関係を知る上でも示唆に富むものといえよう。この点に関しては本題とややはなれるので、触れることをさけておくが、従来筆者の主張して来た点とよく合致するものといえる。(44)

本類に存在する十六個体の大洞C1式土器の多くは図示したとうり、浅鉢、台付浅鉢、皿形土器の破片と考えられるもので、深鉢、注口土器、壺形土器などは含まれていない。このように関東地方の晩期前半の遺跡から出土する大洞系土器が、ある種の器形に集中してしまう傾向は、茨城県法堂遺跡などにも類例がみられる。(45)法堂遺跡では大洞B-C式は鉢または台付鉢が多く、大洞C1式にあたるものの大部分は皿形土器であり、それぞれの器形に多少差異はあるが、共にある限定された器形に集中してしまうという点では規を一にしている。このような傾向が、はたしていかなる理由によるものかは十分明らかにされてはいないが、大洞系の土器が関東に持ち込まれる場合、一方的に流入して来るのではなくそれを受け入れる側に何らかの撰択が行われていたのではないかという事を予測させる。そのような意味で、その内容については今後検討されるとしても、大洞系土器が、何か特殊な意義を持つて関東地方で受け入れられたであろうとする戸沢氏の見解は示唆的である。(46)筆者もこれらの土器は、土偶・土版といった宗教的色彩のつよい一連の遺物が関東に流入して来る場合と同じような状態で解釈する必要があると考えている。

五　結　語

以上真福寺泥炭層遺跡より出土した遺物を中心として、そこから生じた二・三の問題をとりあげて述べて来たが、それを改めて要約すれば左の様になろう。

① 第一類土器としたものは、筆者のいう姥山Ⅱ式土器に相当するものである。出土量はさほど多くなく、十分な分析は行い難かつたが、利根下流地方に共通する要素と、地方的な偏差を有するものとが存在する。

② 第二類土器としたものは、広義の安行Ⅲc式に含まれる土器群であるが、その中には、それぞれ様相を異にする四つのグループの存在が認められる。

③ そのうちで第①のグループとしたものは、型式学的には明らかに古い様相を示しており先の第一類土器（姥山Ⅱ式土器）や、姥山Ⅲ式（第②のグループ）に類似する要素を多く有するものであるが、出土量は小量であり、又層位的な関係も明らかではない。他の類似資料も乏しく、このグループの明確な位置づけを行うことは現在の所困難である。

④ 第②のグループとしたものは、筆者のいう姥山Ⅲ式に相当するものである。これも又第一のグループと同様少量しか出土していないが、これらの内のあるものには、第三のグループにみられる文様要素が複合していることが認められる。これは第二のグループと第三のグループとが、かなり密接な関係を持つものであることを示すものと理解され、これらから筆者は両者が利根下流地域と奥東京湾地域に同時併存したものと推測するのだが、なお問題は将来に残されている。

⑤ 第③のグループとしたものは、量的に多く、第二類土器の主体を占めるのみならず、本遺跡出土土器の主体を占めるものである。本グループは、従来の安行Ⅲc式の中でも、一般に古い部分に相当すると云われているものに類似しており、埼玉県石神貝塚出土の一群とよく内容的に一致をみせ、杉田遺跡出土の安行Ⅲc式（杉田A類）とは様相を異にしている。従つて、同じ安行Ⅲc式といわれる土器の中にも、様相の異つたグループの存在が知られるのであり、これを共に安行Ⅲc式として呼称するのは、記述上の混乱をまねくおそれがある。その様な意味で、漸定的処置として、又杉田A類との差異を明らかにするという意味からも、本グループの土器を今後わたくしは真福寺泥炭式という名で呼ぶことにした。その土器型式の具体的な内容・分布等については、必らずしも十分検討しつくした訳ではなく、将来何らかの形でとりあげる所存である。

⑥ 第④のグループは、量的には先の第①・第②のグループと同様小量しか存在しない。その多くは杉田A類に相当す

るようなものであるが、その全てを真福寺泥炭式から分離して扱い得るか否かは、十分明らかではない。

⑦ 第三類土器としたものは、大洞系精製土器であり量的には大洞C_1式が最も多い。出土状況などからみて、この大洞C_1式土器に関係する関東土着の土器は、真福寺泥炭式土器であるとみられる。器形上からみると、台付銭鉢ないし皿形土器が多く、最近関東地方晩期縄文土器諸型式に付随する大洞系土器のあり方の一つの典型的な姿を捉えることが出来る。

⑧ 今回の調査では、大洞C_2式土器と前浦式土器は出土していない。このことは、真福寺泥炭式とこれらの土器は、本質的に相関関係を持たないものであることを示すものと考えられる。従つて、大洞C_2式に関係する安行III_c式がもしあるとすれば、それは真福寺泥炭式以外の様相を持つた安行III_c式であると考えられ、前浦式との併行関係も、これと同様に考えられるだろう。

以上のように、筆者等が本遺跡の調査を計画したさいの要求に対して、あるていど満足すべき結果を得ることが出来たのは幸いであつたが、又他方新らたなる問題も見出だされ、なお今後の研究を必要とする部分の少くないことも又知られるのである。特に安行III_c式に関しては近来豊富な遺物を出土する遺跡の調査があいついで行われており、それらの資料を中心に近い将来より明確な様相が明らかにされると思われる。本稿が、そのような研究を行う上での一助となれば幸いとする所である。

註

（1）甲野　勇「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」（史前学会小報　二　昭和三年）

（2）山内清男「真福寺貝塚の再吟味」（ドルメン　三ノ一二　昭和九年）同「日本先史土器図譜」（昭和一四年）等。

（3）竹下次作氏の御教示による。

（4）坂詰秀一「埼玉県石神出土の晩期縄文土器」（富士国立公園博物館研究報告第一〇号　昭和卅九年）

（5）杉原荘介・戸沢充則「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」（考古学集刊第二巻一号　昭和卅八年）

(6) 鈴木公雄「千葉県八日市場市久方貝塚の晩期縄文土器に就いて」(史学卅八ノ一　昭和四〇年)

(7) 国学院大学考古学会「埼玉県大宮市奈良瀬戸遺跡展」(若木考古第六八号)同号付録「奈良瀬戸遺跡に於ける安行Ⅲc式の確立とその移行」(昭和卅八年)

(8) 原田良平・竹下次作両氏の御教示による。このさいの出土品の一部は、東京国立博物館に収納されたと聞く。

(9) 鈴木公雄「姥山Ⅱ式土器に関する二、三の問題」(史学卅七ノ一　昭和卅九年)なお、この竹下氏のノートにある安行Ⅲc式については、別に機会を得て紹介を行いたいと考えている。

(10) この場合安行Ⅲc式としたものは、後述する第二類土器全体をさしている。

(11) (9)所引文献参照。

(12) 杉原荘介・大塚初重・戸沢充則・小林三郎「千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器」(駿台史学　一五　昭和卅九年)

(13) 紅村　弘「東海の先史遺跡　綜括編」(東海叢書第一三巻　昭和卅八年)

(14) 杉原荘介・戸沢充則「千葉県堀之内貝塚B地点の調査」(考古学集刊　三ノ一　昭和卅九年)

(15) 向坂鋼二「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」(第四紀研究　二ノ一　昭和卅六年)

(16) 鈴木公雄「千葉県山武郡横芝町姥山、山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」(史学卅六ノ一　昭和卅八年)

(17) (6)所引文献参照。

(18) (9)所引文献参照。

(19) (9)所引文献及、早川智明「大宮市奈良瀬戸出土の土器」(埼玉考古第二号　昭和卅九年)

(20) 桐生市立商業高校社会部、県立桐生高校地歴部「群馬県境町北米岡遺跡発掘報告書」(昭和卅五年)

(21) (4)所引文献参照。

(22) (14)所引文献参照。

(23) 麻生　優・川崎義雄「東京都上目黒・東山遺跡の晩期縄文土器」(古代学研究　三七　昭和卅九年)

(24) 早川智明「所謂安行式土器について――土器型式の再編成に関する予察――」(台地研究　一六　昭和四〇年)

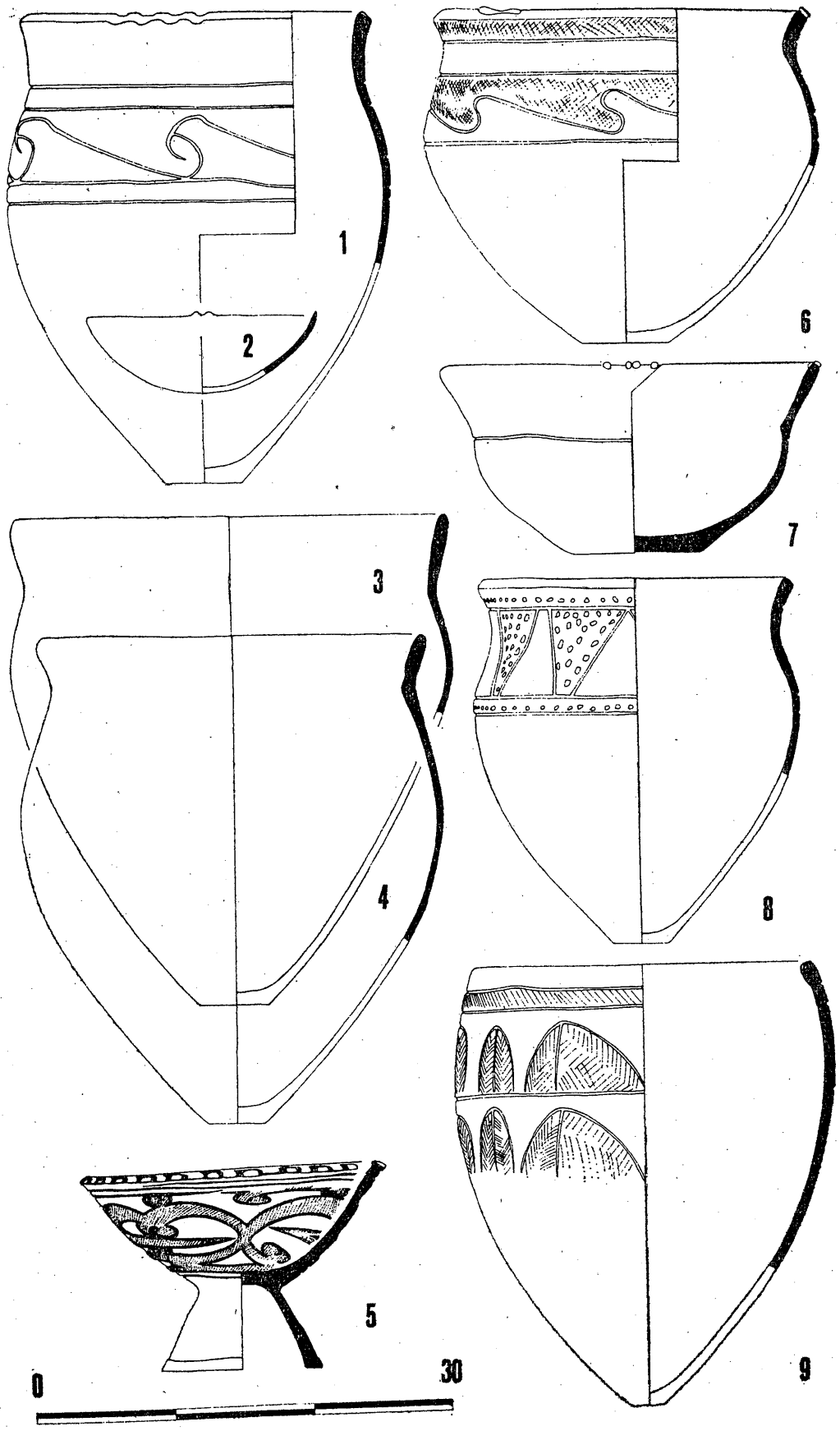
(25) 筆者等の調査した山武姥山遺跡・多古田遺跡・久方貝塚・西村正衛氏の調査になる成田市荒海貝塚などからは、これらの土器は出土していない。

(26) (16)所引文献参照。

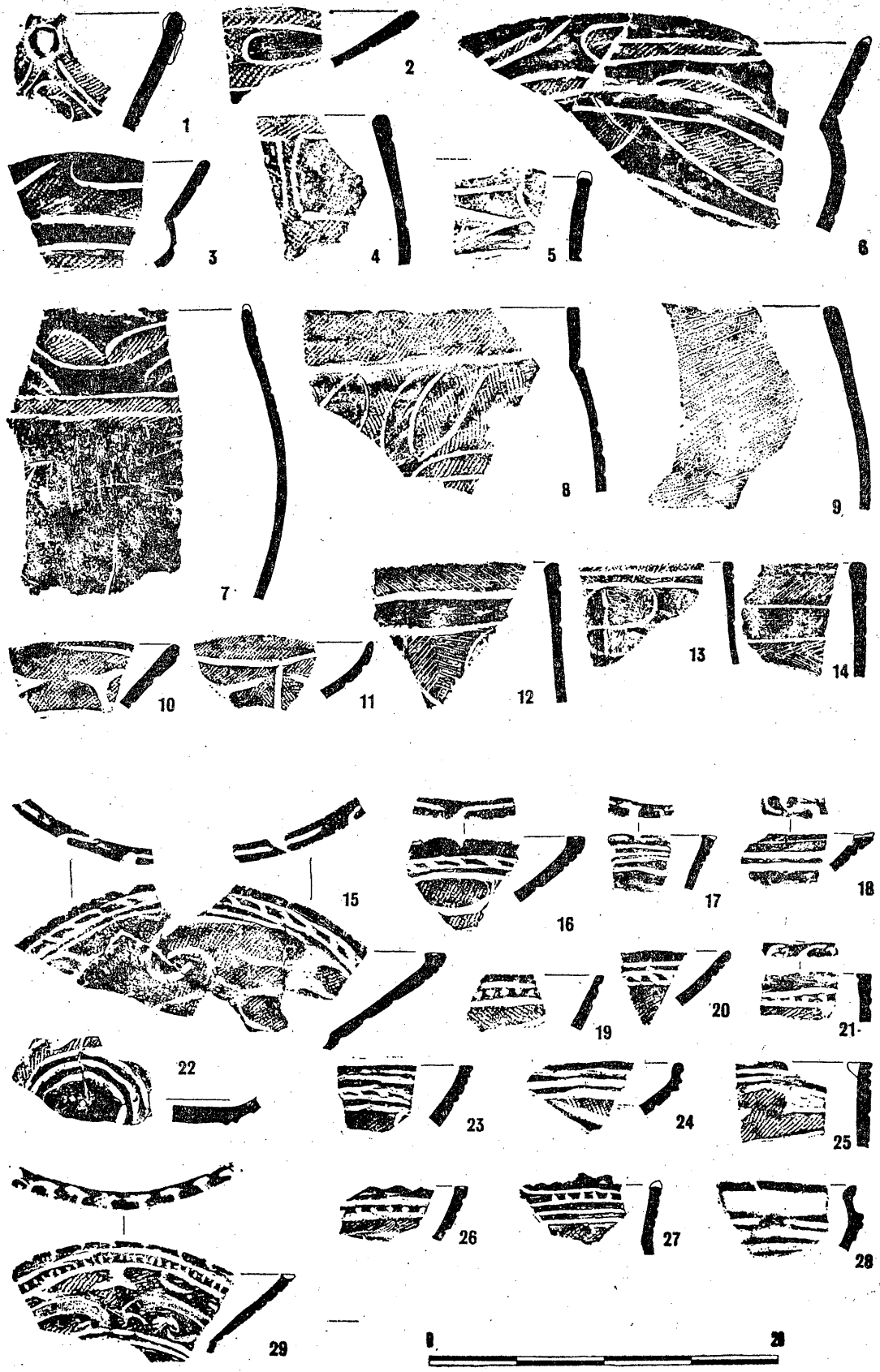
(27) 西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚」(古代二三　昭和卅六年)同「千葉県成田市荒海貝塚C地点発掘報告」(早稲田大学教育学部学術研究第一四号　昭和四〇年)

(28) 「印旛手賀」(早稲田大学考古学研究室報告　第八冊　昭和卅六年)

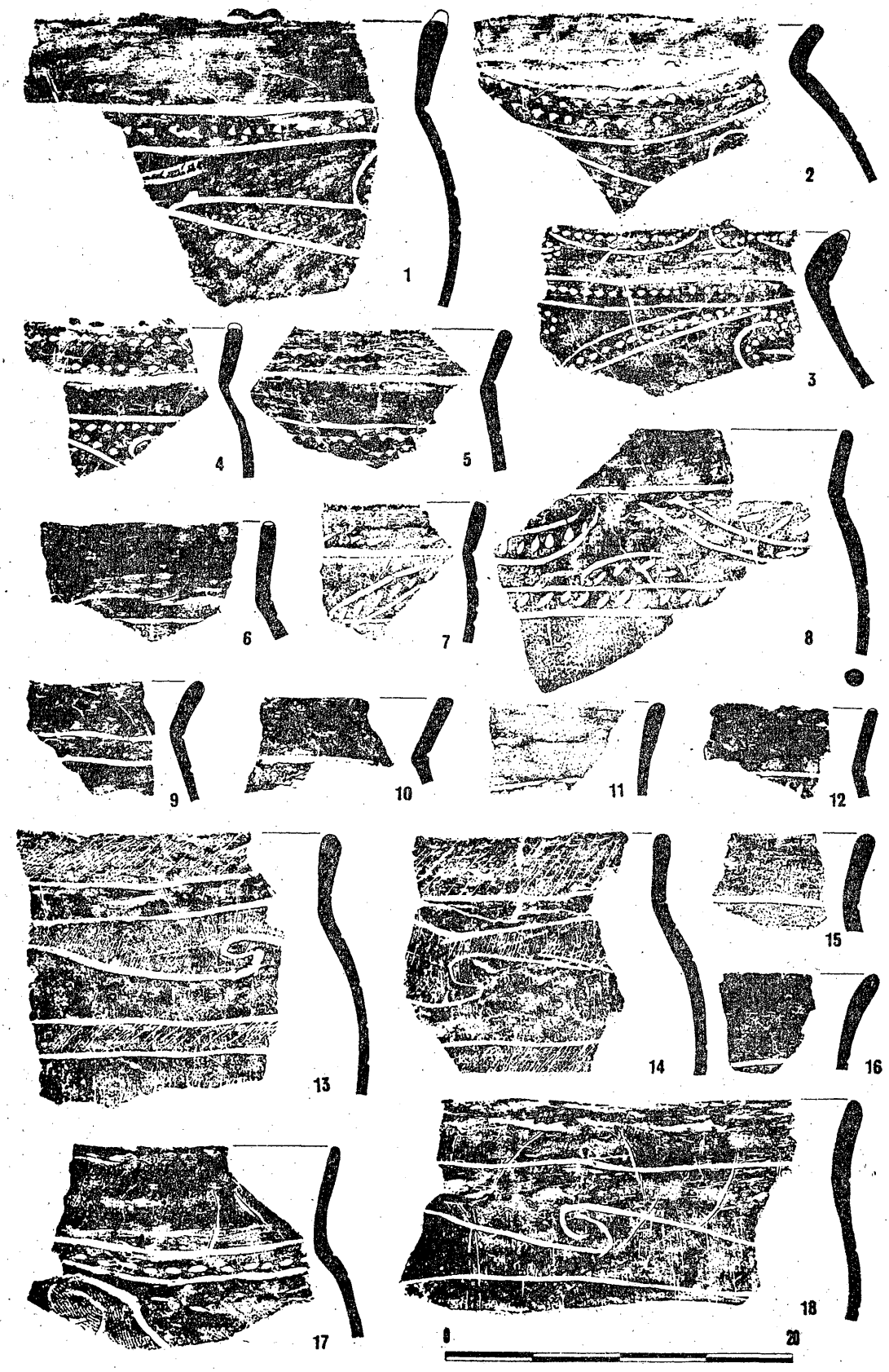
(29) (14)所引文献参照。
(30) 大塚考古学会「松戸市貝ノ花貝塚調査特集」（大塚考古第七号　昭和四一年）
(31) (12)所引文献参照。
(32) (24)所引文献参照。
(33) 戸沢充則・半田純子「茨城県法堂遺跡の調査――『製塩址』をもつ縄文時代晩期の遺跡――」（駿台史学第一八号　昭和四一年）
(34) (9)所引文献参照。
(35) (19)所引文献参照。
(36) (24)所引文献参照。
(37) 吉田　格「埼玉県小室村氷川神社遺跡」（日本考古学　一ノ二　昭和二三年）
(38) (9)所引文献参照。
(39) (23)所引文献参照。
(40) (4)所引文献参照。
(41) (12)(24)所引文献参照。
(42) 京都大学考古学研究室「考古学資料目録　第一部　昭和卅五年）
(43) (42)と同じ。
(44) この点に関しては(6)所引文献に詳しく述べておいた。
(45) (33)所引文献参照。
(46) (14)所引文献参照。
(47) 杉原荘介・戸沢充則「茨城県立木遺跡」（考古学集刊　三ノ二　昭和四十一年）



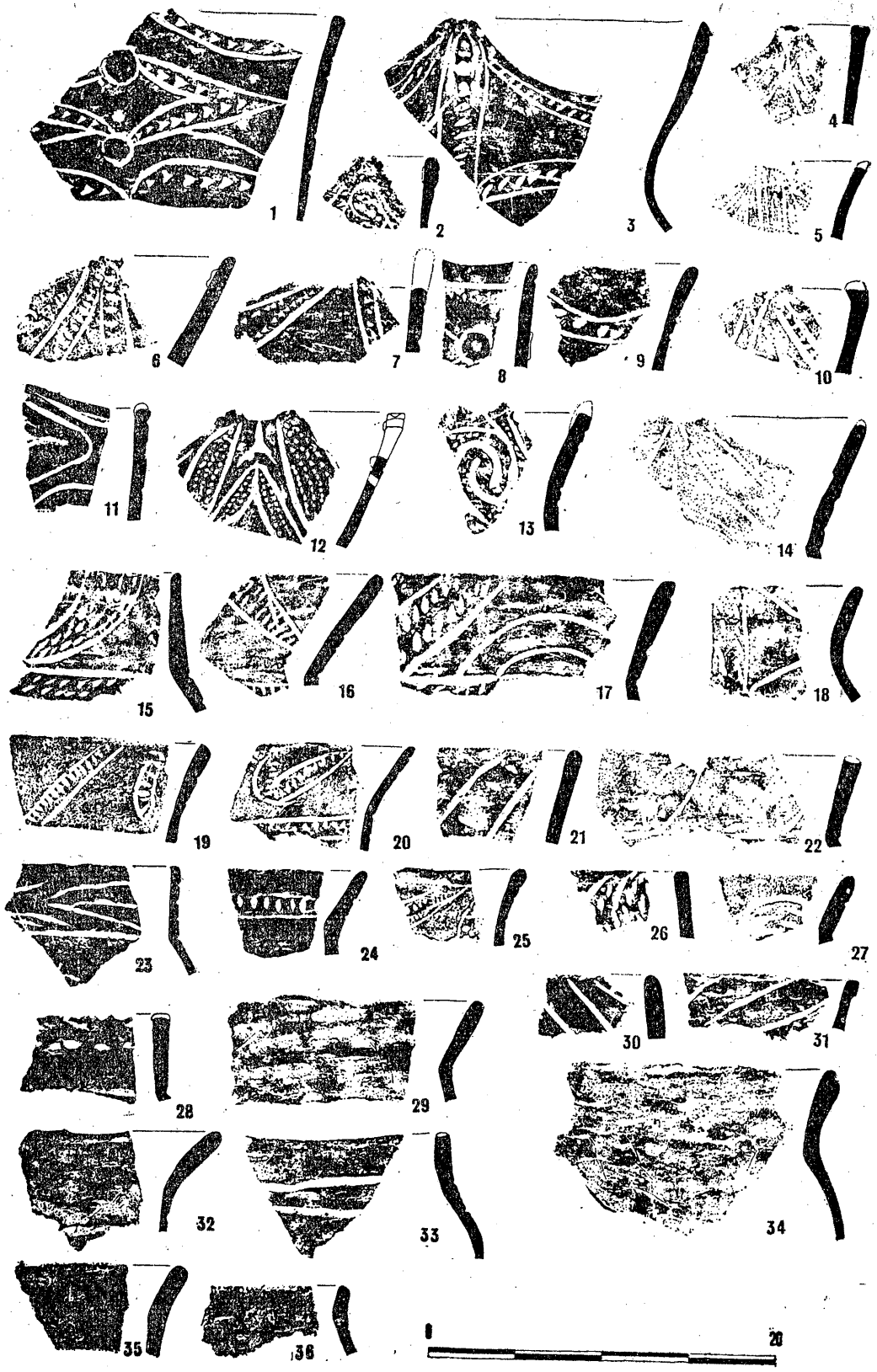
第一図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
20

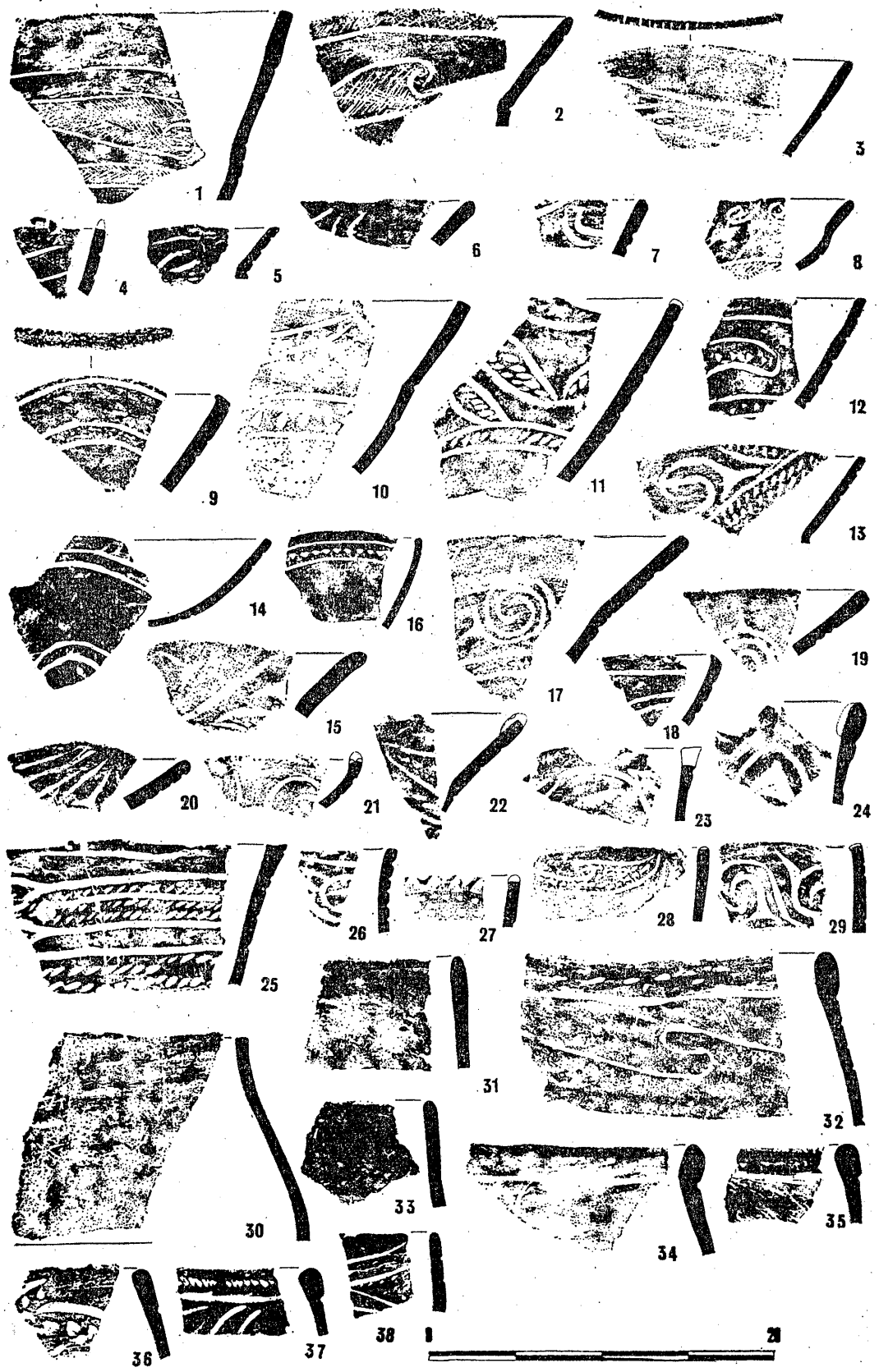
第二図



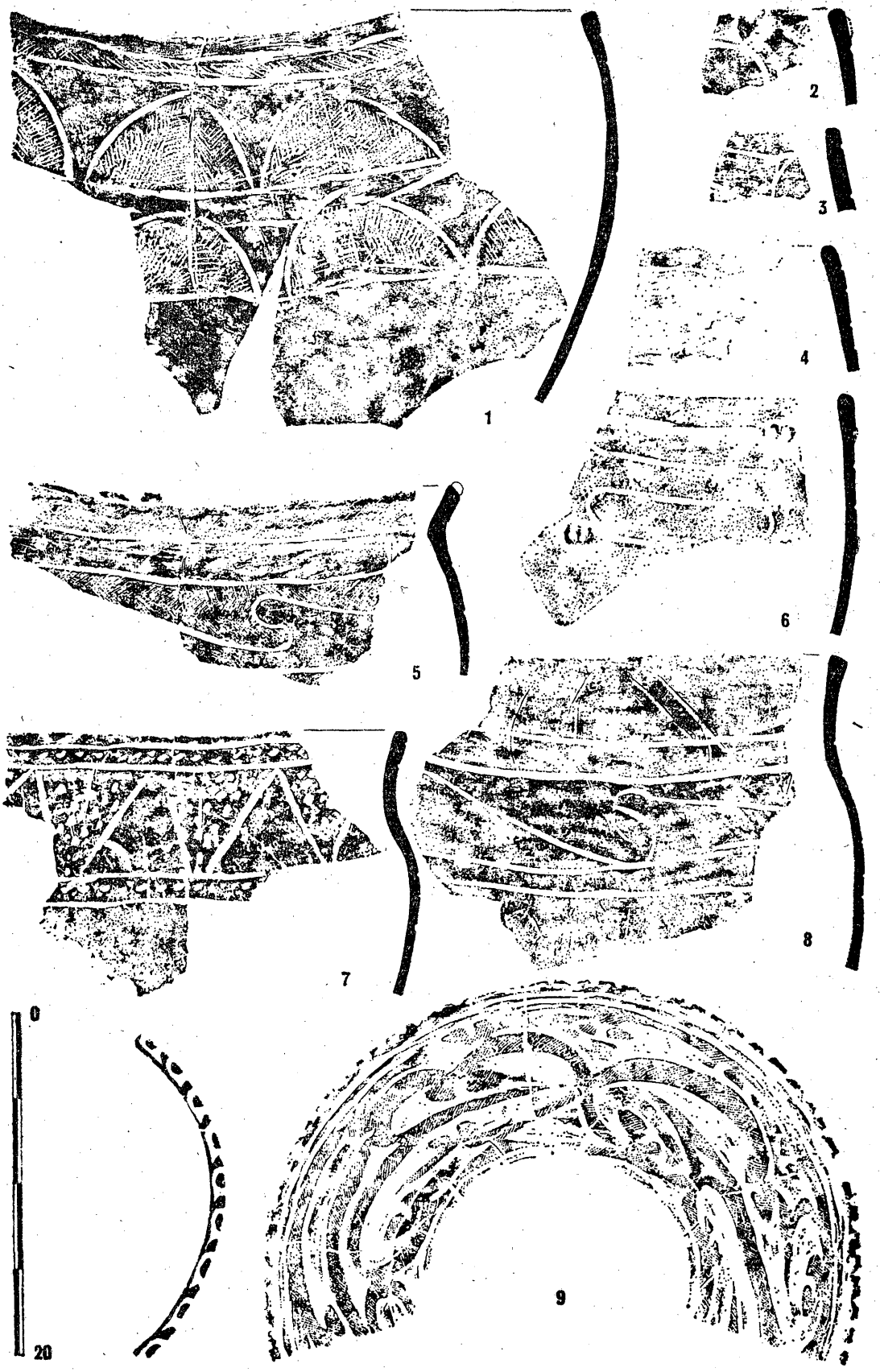
第三図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
20

第四図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
1
2

第五図



第六図